

フロントランナーに聞く 教育のnext

「これからは予測が困難な社会となる」と言われ続けてきたことが、新型コロナウイルスの世界的流行で現実のものとなり、私たちの前に突きつけられました。そうした状況下で、未来の社会を築く子どもたちの教育を、どのように描いていけばよいのでしょうか。教育の最先端で活躍する人たちへのインタビューから、次代の教育のあり方に迫ります。第2回は、「みんながつくる みんなの学校」を合言葉に「すべての子どもの学習権を保障する」学校づくりに校長として情熱を注ぎ、現在は講演や研修を通じて学校改革を支援している木村泰子先生に聞きました。

学校の最上位の目的は、学習権の保障 すべての子が自分らしく学べる場づくりを



大阪府 大阪市立大空小学校
初代校長
木村泰子

きむら・やすこ 大阪府生まれ。小学校教員を経て、2006年度から9年間、大阪市立大空小学校の初代校長を務めた。同校の日常を追ったドキュメンタリー映画『みんなの学校』は、全国公開され、大きな反響を呼んだ。定年退職後は、講演や研修で全国各地を訪れ、すべての子どもが同じ場で学ぶ大切さを伝え続けている。東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員。著書に、『「みんなの学校」から社会を変える～障害のある子を排除しない教育への道～』（共著、小学館新書）、『10年後の子どもに必要な「見えない学力」の育て方』（青春出版社）など。

キーワード ①

学力は、目的ではなく「結果」

—コロナ禍においても、オンラインでの講演や研修の講師を務められ、精力的に活動されています。全国の先生方にどのようなことを伝えていきますか。

木村 講演などはすべてオンラインでの実施で、画面越しの対話となりますが、先生方子どもたちへの思いをひしひしと感じています。昨春の臨時休業中は、学びを止めないためにはどうすればよいのか悩み、臨時休業後は、年度末までに教科書を何とか終わらせようと焦る—。その思いは十分に分かるのですが、遅れた授業を取り戻すことを気にしすぎて、最も大切な「子ども全員が、明日も元気に学校に来る」ことへの思いが置き去りにされているのではないかと思います。

大人が厳しい状況にある時、そのしわ寄せが来やすいのは、立場の弱い子どもです。家庭に居場所がなくなり、学校では詰め込むような授業に追われるとしたら、子どもは苦しむ一方です。教科書の内容を今すべて教えきれなくても、これからの授業の中で学ぶ必要が出てきた時に取り上げればよいはずであり、文部科学省もそれを認めています。

目の前にいる子どもが、今、最も必要としているのは何でしょうか。厚生労働省の発表によると、子どもの自殺が前年比で増えています*。これは深刻な問題です。今は平時以上に、子どもの安心・安全を最優先に、誰一人も見逃すことなく見守り、行動すべきではないでしょうか。そういったことを、講演会では先生方にお話ししています。

—校長を9年間務められた大阪市立大空小学校では、まさしくそうした学校づくりに取り組まれたと思います。

* 厚生労働省の資料を基に文部科学省が2020年12月に作成した資料「児童生徒の自殺の状況について」(<https://www.mhlw.go.jp/content/12201000/000707296.pdf>)を参照。

映画『みんなの学校』とは？

大阪市立大空小学校は、南住吉大空小学校として2006年4月に開校した（2014年に現校名に改称）。その初代校長を務めたのが、木村泰子先生だ。不登校児童がおらず、特別支援学級もなく、同じ教室でみんなと一緒に学ぶ、「すべての子どもに、学校での居場所をつくる」ことを学校づくりの方針に掲げ、「みんながつくる みんなの学校」を合言葉に、児童と教職員に保護者や地域の人々も加わって、学校づくりを進めた。



同校の1年間を追ったドキュメンタリーのテレビ番組「みんなの学校」は、同校の日常を通じて、公教育がどうあるべきか、保護者や地域が学校教育でどのような役割を果たすべきかなどを問いかけた内容が反響を呼び、2013年度文化庁芸術祭のテレビ・ドキュメンタリー部門大賞を受賞。その後、映画化され、2015年、文部科学省の特別選定作品に選ばれた。現在も全国各地で上映会が開かれている。

◎映画の詳しい内容や上映会については下記をご覧ください。
<http://minna-movie.jp/>

木村 大空小学校では開校時から、学校の理念に「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」を掲げています。「学力の保障」を教育目標に掲げる学校が多いと思いますが、学力を保障しようとすれば、勉強のできる子が評価されやすくなります。そうすると、勉強のできる・できないが、個性の「違い」ではなく、優劣を伴う「差」となり、子どもたちを分断してしまいます。それが、自尊感情の低さにつながり、いじめや不登校の一因となっているのです。

学力をつけることは、学習の「目的」ではなく、学習した「結果」です。学力は高い方がよいですし、子どもが知識を身につけ、できないことをできるようにするために、授業を工夫することは重要です。しかし、公教育の最上位の目的は、どのような状況にある子どもも学習できることだと考え、「学習権の保障」を最も重視したのです。それは、当たり前のようにいて実現が難しく、後でお話しするように大空小学校では試行錯誤の日々が続きました。

キーワード 2

子どもを育むのは子ども

—基本的な人権保障の前提となる学習権は、「人権中の人権」とも言われます。「学習権を保障」するために、大空小学校では具体的にどういった実践をしているのでしょうか。

木村 学力や家庭環境、障がいの有無などに関係なく、すべての子どもにとって、学校が安心できる居場所となることを目指しました。大空小学校にも、落ち着いて授業をつくれな子は何人もいましたし、子ども同士のトラブルも毎日のようにありました。そうした時に教員は、その子がなぜ教室にいられないのか、なぜ友だちをいじめてしまったのかに思いを寄せ、寄り添い、見えていなかった内面や背景を浮き彫りにして、子どもの悩みや家庭の問題に向き合うように努めました。そのように教員が寄り添ったからといって、問題がすぐに解決するわけではありません。それでも、子どもがありのままにいられ、思いを語れる場になっていけば、その子にとって学校は安心していられる場

●大空小学校の教育

たった一つの約束

自分がされていやなことは、人にしない、言わない

子どもがつける4つの力

- ・人を大切にする力
- ・自分の考えを持つ力
- ・自分を表現する力
- ・チャレンジする力

*大空小学校のウェブサイトをもとに編集部で作成。

所になるのではないのでしょうか。

周りに迷惑をかけるからといって教室から排除したら、その子が増えつらくなるだけでなく、それを見ている子どもにも差別や偏見を植えつけることになりかねません。ですから、大空小学校には特別支援学級を設けず、多様な子どもが1つの教室で一緒に学ぶことにもこだわりました。—周りからは変わりなく見えても、心に傷を負った子どももいたと思います。そうした子ども一人ひとりと向き合うために、先生方には相当の覚悟が必要であり、負担も大きかったのではないのでしょうか。

木村 大空小学校の合言葉にあるように、私たちはみんなで学校をつくりました。「みんな」とは、子どもや教職員、さらには保護者、地域など、学校にかかわるすべての人たちです。校内にはいつも何人も保護者や地域のサポーターが歩いていて、子どもに話しかけています。そうした触れ合いを重ねるうちに、子どもは保護者や教員には言いにくい本音や悩みを、サポーターには打ち明けることもあります。それを教員とも共有し、子どもが抱える課題に学校全体で向き合っています。

そして、子どもを支えるいちばん身近な存在が、子どもです。子どもは、周りの子どもとの学びや遊びを通じて人間関係を築き、成長していきます。もちろん、子ども同士でぶつかり合うこともあります。そうした時こそ教員の出番です。教員は、どちらが悪いのかをジャッジするのではなく、双方の言葉を「通訳して」心の内を伝え合えるようにし、こじれた関係を解きほぐす役に徹します。

「自分がされていやなことは、人にしない、言わない」という「たった一つの約束」もつくりました。それを子どもも教職員も何よりも大切にし、約束を破ってしまった時は自分から自分のためにやり直しをします。私がやり直し第1号だったこともあり、校長室がやり直しの部屋になっています。約束を破った本人が、「自分がされると嫌だから、ほかの人にももうしない」と思い、同じことを繰り返さないためにどうすればよいかを考えて行動することが、安心できる学校づくりにつながり、その子自身の成長を促すのです。

キーワード 3

「教えるプロ」から「学びのプロ」に

—コロナ禍によって教育活動に様々な制約がある中で、学校現場には新学習指導要領への対応が求められています。実践上のヒントはありますか。

木村 大空小学校では、「子どもがつける4つの力」として、「人を大切にする力」「自分の考えを持つ力」「自分を表現する力」「チャレンジする力」を大切にしています。新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」はまさにこの4つの力に対応しています。新学習指導要領の趣旨は、社会で生きて働く力の育成にあり、それを実現させることはとても重要だと、私は捉えています。

ここで立ち止まって考えてほしいのは、子どもを主語にして学びを捉えることの重要性です。学びは、「教員が」教えるものではなく、「子どもが」学ぶものです。

例えば、研修で先生方に、「主体的に学ぶ姿」とはどのような姿かと質問すると、「自ら学ぶ姿」「自分の考えを自ら伝える姿」といった答えがよく返ってきます。しかし、それらは「自主的」な姿であり、「主体的」ではありません。両者の違いを説明すると、「自主的」とは、決められた事柄があり、それに自分から進んで取り組む行為です。学び

であれば、学習の目標や内容が決まっていて、それを保護者や教員に言われなくても取り組む状態といえます。一方、「主体的」とは、活動の主体が自分であり、目標を自分で考え、すべきことを判断する行為です。学びであれば、学習の目標や内容、手段などを自分で考え、判断して、進めていく状態を指します。

まずは、目の前の子どもが主体的に学ぶ姿や、対話的に学ぶ姿、深く学ぶ姿を具体的に思い浮かべてみてください。そして、どうすればその姿になるのか、教員間で語り合ってみるとよいと思います。

—子ども主体の学びの実現に向けて、学校をマネジメントする立場の方は何をすべきでしょうか。

木村 私は大空小学校の開校時から校長を務めました。開校1年目に「教えるのはやめよう」と先生方と話し合いました。教員は、子どもに「教える」ことが仕事だと捉えがちですが、子どもが学んでいる事実こそが教員に課せられた仕事だからです。

しかし、教員には「教える」ことが染みついている、意識を転換するのは容易ではありません。そこで、私は、子どもが「学ぶ」ことについて、日常的に職員室で雑談しました。4つの力は育っているか、10年後の社会で生きて働く力になっているか。それらが実現していなければ、改善策を考えました。学びの形は子どもの数だけあります。それでも、「子どもが学ぶ状態をつくられているか？」と問いかけ、自分たちを変えようと思いました。

そのように、教員は「教えるプロ」から「学びのプロ」になり、教員が学ぶ姿を子どもに示すことも大切です。子どもは、憧れの人ができること、その姿を目標に自ら学び始めます。子どもにとって身近な大人である教員の学ぶ姿を、学校生活を通じて示していく。たとえ失敗しても、「ごめん、やり直すから」と、自分を変えようとする姿をありのままに見せていくのです。管理職も同じで、子どもに対してだ

●主体的・対話的で深い学びの実現に向けて—「教えるプロ」から「学びのプロ」の集団に！

木村先生からの問いかけ1

学校は、教員が教える場所？
子どもが学ぶ場所？

子どもを主語にして
学びを捉える！

*木村先生への取材を基に編集部で作成。

木村先生からの問いかけ2

子どもが学ぶ状態をつくられているか？
目指す力が育っているか？

主体的に
学ぶ姿とは？

対話的に
学ぶ姿とは？

深く
学ぶ姿とは？



けでなく教員に対しても学ぶ姿を見せることが大切です。

—日々の授業における教員の役割とは、何でしょうか。

木村 学校は、昨日できなかったことが今日できて、明日はもっと力を高めていくというように、子どもが成長していく場所です。そのためには、子ども主体の学びとはいえ、子どもにすべて任せればよいわけではありません。

教員の役割は、子どもの状態に応じた適切な目標を示すことだと考えます。目標が高すぎると、無理だと感じて最初から挑戦する意欲を持たず、逆に低ければ、力を持って余してしまいます。少し頑張れば達成できそうな目標を示し、そこに到達したら、また少し高い目標を示す。そうしたことは、高い専門性を持つ教員だからこそできるのです。

ただし、学びは一人ひとりで異なりますから、個々をしっかり見取り、1クラスに30人いたら30通りの目標の提示が必要となります。それを1人の教員が行うには負担が大きすぎますから、学校全体が1つのチームとなって複数の目で子どもを見取り、情報を共有することが重要なのです。



学びの主語は、子どもです。
教員が教えるのが学びではなく、
子どもが自ら学ぶのです。

キーワード 4

社会を築く一員という自覚を育む

—最後に、先生方へのメッセージをお願いします。

木村 これまでお話したように、大空小学校では、学習権の保障を目指し、教科学力だけにこだわらない、社会で生きて働く力の育成を大切にしてきました。開校9年目には、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」で、全国1位の県の平均正答率を8ポイント上回る結果が出ました。さらに驚いたことに、無解答が全くありませんでした。大切にしてきた4つの力のうち「チャレンジする力」が発揮されたからだと思います。

社会で生きて働く力が高まれば、教科学力は結果としてついてくる。それは、大空小学校での実践を踏まえてはつきりと言えます。新学習指導要領が示すように、学校教育には、社会で生きて働く力の育成へと大きく舵を切ることが求められています。そうした今だからこそ、子どもたち

に真に必要なことを見つめ、実践するチャンスです。一人ひとりが自分を変える。その営みを全員が行えば、教育や学校を変えていけるはずです。

一生懸命にやったとしても、子どもの学びに結びつかないこともあるでしょう。そうした時は指導を自己評価し、若手であろうとベテランであろうとやり直すという姿勢を持ってください。私は退職間際まで「校長、今のはアウト」と同僚から言ってもらい、互いに自浄作用を高めていました。

教育は、社会をつくる原動力です。教育を受けた子どもが大人になると、収入や職業、社会的地位などに関係なく、すべての人が社会を築く一員となります。そうした自覚のある大人への成長を支えることが、義務教育9年間の重要な役割ではないでしょうか。

コロナ禍の今も、社会は未来に向けて進み続けています。その社会を築く人々を育む教育も、また進み続けなければなりません。10年後、20年後の社会を思い描いて、今、目の前にいる子どもに学ぶ大人になりたいものです。

木村先生とウェブ上で対話しませんか

From the front-runner

木村先生から読者の皆様へのメッセージを動画でご視聴いただけます。

To the front-runner

木村先生へのご質問や、本コーナーへのご意見・ご感想をお寄せください。木村先生へのご質問には、先生ご自身からの回答をウェブサイト上に公開します。質問内容は、本コーナーの内容に関するもののほか、映画『みんなの学校』や木村先生の著書に関するものも大歓迎です。

※ご質問内容によっては、公開を控える場合もございます。ご了承ください。

木村先生のメッセージ動画、
質問フォームのアクセスはこちらから！

<https://berd.benesse.jp/magazine/board/booklet/?id=5566>

VIEW21 教育委員会版 検索

右記の二次元コードからも
アクセスできます。▶▶▶

